

幕藩体制から明治新政へ激変に揺らぐ郷土

貞順院帰着

前藩主奥方が御廟供養のため 金田の六角家屋敷に留まる。

手を合わせ続けた 金田での日々

家督を相続した10代藩主・小笠原忠愍が熊本から帰着したおよそ1か月後、前藩主・忠幹の正室・貞順院は慶応4年(1868)4月13日に熊本を出発。4月19日に金田手永の大庄屋・六角家の屋敷に入りました。当初、六角家の屋敷は、藩主・忠愍が屋形(藩主邸宅)として使用する手配になっていましたが、前藩主・忠幹の御廟が近くにあることから、その供養のため貞順院が住む館になったと伝えられています。その間、六角家の家族は屋敷の外に仮住まいを建てて移りました。



貞順院(父は小舎代藩主・小笠原忠愍のちに6代藩主・忠固の養女となる。播磨明石藩主から小舎9代藩主となった忠幹の正室。第二次長州戦争の藩の領地では農村志津藩ら藩士を激励した。写真は晩年の貞順院(資料/金田町史)

貞順院は金田滞留中のおよそ2年間、亡き藩主・忠幹の御廟参拝を欠かさないたと伝えられています。碧嚴寺の境内には、貞順院が参拝の際に使ったといわれる「手洗い鉢」が今も残されています。

つかの間の豊津藩 決別の夜から一揆に

慶応4年9月8日、明治に改元され、その後も国家体制や社会がめまぐるしく変化していきました。明治2年(1869)の「版籍奉還」は、6月17日から25日にかけて各藩にすべての領地と人民を返還させ、大名を知事に任命するという制度でした。これにより、香春藩では藩主・忠愍が知事となります。翌、明治3年(1870)1月に香春藩庁を豊津(みやこ町)に移して「豊津藩」に改称。明治4年(1871)7月には「廃藩置県」が行われ、旧藩主に東京在住が命じられました。

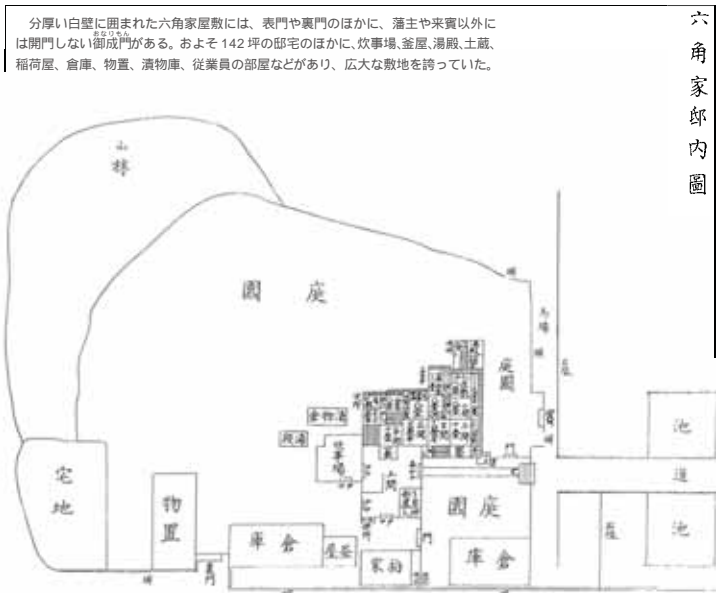


1年半のわずかな間の藩庁となった豊津藩の印(錦陵同窓会所有)

8月に小笠原忠愍が、その上京に先立って郡内を巡回。別れをかねて草場(福智町市場)で催した鯉狩は盛大なものだったと記録されています。その後、忠愍は父・忠幹の御廟を参拝し、9月9日に六角家屋敷で一夜を過ごしました。その時、周辺の領民が大挙して金田に集まり、各手永の代表が忠愍の東京移住中止を懇願したといわれています。そして、10日後の9月19日、忠愍が東京に向けて乗船。多くの住民が見送った後、家路につく途中で「探の話が持ち上がり、その日の夜から翌20日(下田川は21日まで)にかけて、「田川一揆」が勃発します。領主を失った失望感と幕末からの重い住民負担、そして、行く末の不安から生じた一揆でした。



旧藩主屋敷・赤川氏宅(豊谷川沿い)・市場に残る田川一揆の柱。幕末から明治の上も打ち壊しがあつたといふ。幕末からの社会急変が導き、加担者の形跡は比較的に残っている。



六角家邸内図

分厚い白壁に囲まれた六角家屋敷には、表門や裏門のほか、藩主や来賓以外には開門しない御成門がある。およそ142坪の邸宅のほか、炊事場、釜屋、湯殿、土蔵、稲荷屋、倉庫、物置、漬物庫、従業員部屋などがあり、広大な敷地を誇っていた。

福田昌さんに聞く

藩主・忠幹の御廟は、廃藩置県後に菩提寺の福聚寺に移りましたが、わたしが幼いころもその一帯を御廟と呼んでいました。当時を知っていた古老の話によると、貞順院が参拝にいく際には前触れがあり、領民は表に出て敬意を表したといいます。ずいぶんと立派な駕籠に乗っていたそうです。貞順院の六角家屋敷滞在には少なくとも20人以上のお供がいて、周囲をあげてもてなしたと伝えられています。

INTERVIEW



【ふくだまさひろ】郷土の歴史を詳しく。金田町史編さんにもたずねた。福智町文化財専門委員(金田町)



貞順院が御廟参拝の際に使ったと伝えられる手洗い鉢

厚い白壁を残す六角家屋敷(東金田)。表門のそばには鉄砲穴がある。奥に見えるのが、御成門。